

# 佛敎研究

第壹卷 第壹號

## 舍衛城及び祇園精舎の研究

赤 沼 智 善

はしがき

舍衛城の位置確定

佛敎史上に於ける舍衛城の位置

佛陀二十五年夏坐——舍衛城生れの佛弟子——舍衛城周圍の佛陀史蹟——舍衛城に於ける佛敎史

喬薩羅國王波斯匿王

王統——波斯匿王周圍の人物——王の没落の原因

祇園精舎と給孤獨長者

長者及び長者の周圍の人物——祇園精舎の建築物

舍衛城及び祇園精舎の研究

## は し が き

私は、昨年英國よりの歸途、印度に立ち寄り、多年の心願であつた佛跡參拜を果さうといふ考であつたが、不幸にして、英國官憲の許す所とならず、北に向つて、釋尊の聖跡を遙拜し、遺憾千萬ながら印度洋を素通りして來たのであるが、先に岡教達氏、次いで同窓泉芳環君、引き續いて鹿子木員信氏の一行が參拜せられ、各々雜誌に新聞にその巡禮記を公にせられたのを見て、幾分永年の渴を醫するを得た。然し遺憾なことにはその何れにも歴史的及び考古學的研究發表がない。それで私は不敏を耻ぢず、茲に舍衛城及び祇園精舍に關する一應の研究をして見たいと思ふ。若しこれが他日の巡禮者の臨地研究の一助ともならば幸である。

## 舍衛城の位置確定

舍衛城は釋尊出世前後に最も隆盛を極めた都市で、それよりずっと以前の事も史料に顯はれて居らず、又波斯匿王系の没落と共に、その名も聞えなくなつたが、紀元前六世紀頃は恒河々南の王舍城と共に印度二大勢力の中心地で、又、佛教の發育する搖籃であつた。爾來數十年、幾度か桑田の變はあつたけれども、その名は、祇園精舍の名と共に、吾々佛教徒の忘るゝことの出来ないものと

なつた。舍衛城の原音は云ふ迄もなく *Sāvasthi* と *Sāvasthā* 王の建設した都市といふことであるが、*Pāṇina Sūtra* P. 50. には三義を出してその名を解釋してゐる。第一は *Sāvasthā* 聖者の住居せし所故、*Sāvasthi*. 第二義は、如何なる享樂も、すべてある (*abha atthi*) 故に *Sāvasthi*. 第三義は、商業の中心地で、諸方から隊商が集まり來り、如何なる商品も、すべてある (*Sabba atthi*) 故に、*Sāvasthi* といふのである。私は、市の名の眞の起源に就いては未だ分明的な見解を持たぬ。

經典以外、この市の記録を、吾等に殘して呉れたのは、法顯玄奘兩師の旅行記である。兩師の後、既に千年餘の星霜を送つて、この吾等に取つて尊い忘るゝ事の出來ない市の事も、全く不知の世界となつて仕舞ふたのであるが、幸ひ、近時の印度考古學的研究と共に、だん／＼市の事も明かになつて來たのは嬉しい事である。今日では、舍衛城の位置は略確定事となつた。私はこの研究に於て、舍衛城の位置について論議せんとするものではないが、位置確定について功勞ある考古學者に尊敬を拂ふて、簡單にその發掘史を述べて行きたい。

千八百六十三年の正月、カンニン・ハム氏は、サヘート・マヘート (*Sāheh-Mahethi*) の地を發掘して、舍衛城の舊地であると斷定し、後千八百七十六年に有力なる證據を發見して之を確むることが出來た。A.S.R. Vol. I PP. 330ff, Vol. XI pp. 78ff. 地はバルラインプールからアカウナーに通ずる道路を一寸南に折れた處で、バルラインプールから十二哩西に當る。巡拜者はバルラインプール停車

場から馬車を馳るを普通とする。その有力なる證據といふは、祇園に當るべきサヘートの地にて、一菩薩像を發掘したが、この菩薩像の臺石に、貴霜朝の文字で、左の如く彫りつけてあるのである。

1. [Mahārājasya devaputra ya Kanishkasya (or Huriškasya) sam.....di] 10 g etaye purvaye  
bikshusya Pushya[va].

2. [dhis]ya saddhy[e] viharisya bhikshusya Balasya trepitakasya danam B[o]dhisatvo chhātram  
dāṇḍaś=cha Śavastīye Bhagvato chankame.

3. Kosambakūṭīye acharyānām Sarvas ivādinam parigahe.

〔天子カニシカ(或はフギシカ)大王の〇年〇月〕十九〔日〕。この日、一菩薩の像、傘蓋と棒柱と共に、ブシュヤヅッデ比丘の共住者、比丘バラ三藏の施として一切有部の諸師が領受せらるゝ様、舍衛城コーサンバクテの世尊の經行處に(建てられたり)。

これは Bloch 博士の讀方に従つたもので、〔 〕の中は、同氏の補足されたものである。年號が失はれてゐるが、この施者のバラ比丘は同じく一菩薩像をサルナートに建立してゐて、その銘文に Mahārājasya devaputrasya Huv[ī]shkasyasam 30 3 gri 1 di 8 云々とあるので、これから年を加へたものである。(Epi. Ind. VIII P. 181.) 處が千九百〇七年にヴォーゲル氏はラックノウ博物館に、この菩薩像の傘蓋の柱の一片と思はるゝ破片を發見してゐる。それにも明に Sāvās[t]īye と彫つて



ある、唯、誰がこの破片を何處から持つて來たものか明白でないが、恐らく千八百八十四年にサヘート・マヘートを發掘したホーエー氏がサヘートから持つて來たものであらうと云つてゐる。(J. R.A.S.I. 08. P. 973)。

既に、舍衛城の祇園精舍の中コーサンバクテの經行處に建立したといふ菩薩像とその傘蓋柱が發見せられてゐる以上、サヘートの地を祇園精舍、マヘートの地を舍衛城と認定するのは當然であるが、唯少しく法顯玄奘兩師の記載せる舍衛城對迦維羅城の距離及び方向が合はぬ。その上に、この菩薩像は、眞の祇園精舍が廢趾となつた時に、そこから今の發見地に移したものかも知れぬ。この證據に立ちて、サヘート祇園精舍説を破し、自ら舍衛城趾を發見したといふのが、ギンセント・スミス氏である。氏は王立亞細亞協會雜誌一八九八(五〇三頁以下)、一九〇〇(一頁以下)及び一九〇八(七九二頁註二)にてその主張を公にしてゐる。氏の説に依ると、法顯玄奘兩師は二世紀も時を隔てゝ、印度を巡歴し、法顯師は由旬、玄奘三藏は里を計數に用ゐて居るが、大體に於て舍衛城を迦維羅衛城の北西九十哩としてゐる。然るにサヘート・マヘートは迦維羅城から西南西五十五哩程に當つてゐるから、サヘート・マヘートを舍衛城に當てる事は適當でない。實測に依つて、氏及びヴォスト氏が發見した地點、即ち、チバールのバーラーブルの村にある廢趾が其の舍衛城でなくてはならぬ。有力な證據として擧げられた例の菩薩像の如きは偶々この舍衛城及祇園精舍が廢趾となつた時

に、ラプテ河の水利を利用して現在の發見地に移したものに過ぎぬといふのである。然し『佛國記』、『西域記』共にその西行と云ひ東南行といふも、左程精確には行つて居らぬ。喩へば『佛國記』が迦葉佛所生所の都維(Śetavya)を城西五十里とするに對し、『西域記』は西北六十里としてゐる。それであるから迦維羅城と舍衛城の位置關係に於ても、兩記はスミス氏のいふが如くそんなに依憑すべき精確な標準ではない。只大體を知る上に於ての尊い史料であると曰ふに留まる。兩記の記事を最後の根據として論難し、佛像移轉説を以てサヘート・マヘート舍衛城説を破らんとするスミス氏の説は、バーラーブルの廢趾に非常な有力な證據の擧らない限り極めて薄弱であると曰はねばならぬ。

之に反して、サヘート・マヘートの方からは、その後種々有力な證據が顯はれてゐる。千九百〇七年のヴォーゲル氏がダヤ・ラム・サーニ氏(Paṇḍit Daya Ram Sahni)と共にこの地の發掘をした時には、サヘートの方から、刻文のある銅板を發見した。この銅板に依れば、サンワット一千百八十六年アーサールダ月の満月の日、曲女城のゴヴィンダチャンドラ(Govindachandra)王が、ブッダバッタ・トラカ比丘(Buddhabhaddhāraka)を上座とする祇園精舍の敎團に六ヶ村の朱印地を與へた文書である。(A.S.R. 1907-8 p. 120. Ep. Ind. Vol. X. etc.)。この文書の發見は舍衛城位置確定の最後の證據であると思はれたが、スミス氏は猶も、執拗に、この文書も他から移轉されたものであると固執してゐる(J.R.A.S. 1908 p. 792 n. 2)。處が更に千九百〇八年にマーシャル氏がヴォーゲル氏の後を

承けて、此の地の發掘をした時には、種々貴重な考古物が發見されたが、その中に又一つ舍衛城の祇園精舎といふ文字のある刻文を具へた一大菩薩の座像が發見された。その座像は、上部は破はれ下部だけ残つてゐるが、刻文は四行で、上三行は貴霜朝の文字、下一行は八九世紀頃のナーガリー文字である。マーシャル氏の讀方に依れば、この上三行は、舍衛城の祇園精舎に、刹帝利族の兄弟達——その一人はシヴダラと呼ばれるものなるが——茲に一菩薩の像を建立する。彫刻者はマトゥラー人であるといふのである。かくの如く、このサヘートだけで、既に、祇園精舎の刻文ある二菩薩像、朱印地獻納の一文書の銅板が發見せられ、殊に朱印地となつた六ヶ村の名は、今でもその附近に求め得るといふ事である。これだけの證據が擧つて見ると、サヘート祇園精舎説は今確實な事と曰はねばならぬ。従つてマヘート舍衛城説も正しいと曰はねばならぬ。猶この外に舍衛城と祇園精舎の位置の關係とが、舍衛城の附近を流れてゐた古のアチラワテー河が、今のラブテー河であること等の從屬的證據も澤山あるが、今一々擧ぐるの要もあるまい。マーシャル氏は、王立亞細亞協會雜誌一九〇九年の一〇六六頁以下に委しく論じてゐられる。猶外に Dr. Hoey も兩度この地の發掘をして、考古物の發見も多くあるが、位置確定に就いては重要なものがないから、茲には言及しない事にした。以上の諸氏の勞苦に依つて我々の紀念すべき舍衛城及び祇園精舎の位置が發見せられ確定された事は感謝に堪わない次第である。

## 佛教史上に於ける舍衛城の位置

云ふ迄もなく、喬薩羅と摩揭陀とは、釋尊當時に於ける二大勢力であつた。處々に殘存せる小共和國は漸次に此等の大勢力の王國に併合せられつゝあつた。北方のタキシラガ、正當派の婆羅門敎學の中心地であつたに對し、摩揭陀の首都王舍城は當時の自由派の敎學の中心點であつた事は明白であるが、喬薩羅の首都舍衛城も亦、ヒマラヤ山麓一帯の地の特殊の文化の淵藪であつたに相違ない。それ故に釋尊の敎化が、この王舍城、舍衛城の二大都市を征服したことは、やかて全印度の敎化的征服を語るものである。王舍城に於ける釋尊の敎化は、その成道後二三年の間が最も盛んであつて、遂に市民の中に、「沙門喬答摩は、子を無くする者、寡婦を作る者、家系を斷絶せしむる者」といふ非難(Vinaya, Mahāvagga I. 24.5)をなす者あるに至つた程である。舍衛城の敎化は、成道第四年以後であるが、これ又非常の勢を以て進み、上は王家の後宮から、下は道掃除人の果に至るまで、其の化に參するを喜んだ。覺音は、舍衛城七俱低の中五俱低は、聖弟子であつた(Dhāp. A. I. 1. 3)と曰つてゐる程である。それに釋尊は最も多く、この舍衛城に於て雨期を過された。雨期を過すといふことは三ヶ月間住するといふことで、他は他處に住し又は遊行せられるのであるから、これを以てその宿住が最も長かつたと速斷する譯には行かない。一體釋尊の一年は大抵舍衛城と王

舍城との間の往還に費やされたので、其の路も大體三本より外はない。この三本の道の何れかを通つて、兩都市の間を往還してゐられたのである。それで最も長く且つ多く宿住せられた場處はと曰へば王舍城か舍衛城であるが、その中でも、舍衛城に最も長く居られた様である。雨期の安居から曰へば、舍衛城の方の數が一番多い。王舍城には五返か七返の安居であるが、舍衛城には、『八大靈塔經』(宿八・七三)に依れば二十三年『僧伽羅刹所集經』(藏七・一二〇)に依れば二十年、『分別功德論』(藏四・五一)、『法顯傳』(致六・三左)に依れば、二十五年、『法句經註』(i. p. 2)に依れば、祇園精舍に十九年、東園精者に六年都合廿五年夏座せられた。この夏座の多い一事でも、釋尊と舍衛城との關係、根本佛教と舍衛城との關係は明白なる譯である。

更にこれを弟子衆の上から見ると又明白である。煩はしいが、一目瞭然たらしむるために、四衆に分つてその弟子達の名を上げて見やう。

# I 比丘

人名	種姓	Ajina	”
Abhaya	Brāhmaṇa	Ajijuna	Vessa
Adhimutta	”	Angulimāla	Brāhmaṇa
Aggidaṭṭha	”	Atimuttaka	Vessa
Ahimsaka	bharadvāja	Ātuma	”
”	”	Belatthakāni	Brāhmaṇa

Belatthasisa	”	Kāṭiyāna	”
Bhadda	Vessa	Khitāka	”
Brahmadatta	Khattiya	Kulla	”
? Brahmadeva	Brāhmaṇa	Kula	”
Cakḥupāla	Vessa	Kummāla Kassape (今は生地に ついで云ふ)	Vessa
Candana	”	Kuṇḍadhāna	Brāhmaṇa
Citta hatthirohaputta	Sudda	Lakuṇṭaka Bhaddiya	Vessa
Dāsaka	”	Mahānāma	Brāhmaṇa
Ekūḍāniya	Vessa	Mahāsuvanna	Vesso
Eraka	”	Mālunkyauputta	”
Gangāṭṭiya	”	Mānava	Brāhmaṇa
Godatta	”	Migajāla	Vesso
Hattharonaputta	Sudda	Nandaka	Khattiya
Jenta purohitaputta	Brāhmaṇa	Nigrodha	Brāhmaṇa
Kankha Revata	Vessa	Nītā	”
Kappaṭa-Kura	Sudda	Palika	Vesso
Kassapa	Brāhmaṇa	Parāyariya	Brāhmaṇa

Piṇḍāvaccho	”	Sobhita	Brāhmaṇa
Posiya	Vessa	Sopāka	Sudda
Puṇṇamāsa	”	Subhūti	Vessa
Putigatta Tissa	?	Sugandha	”
Rājadatta	Vessa	Sumangala	” Kassaka
Ramaṇeyyaka	”	Suppiya	Sudda
Sabbaka	Brāhmaṇa	Tissa	?
Sabbamitta	”	Tissa	?
? Sabhiya	Khattiya	Ukkhepakata vaccha	Brāhmaṇa
Sangāmaji	Vessa	Upavāṇa	”
Samiddhi	Brāhmaṇa	Uttarapāla	”
Samitūgutta	”	Uttiya	Khattiya
Sankicca	”	Vacchagotta	?, Pabbajaka
Sangarakkhita	Vessa	Vakkali	Brāhmaṇa
Sānu	‘	Valliya	”
Singālapita	”	Vaṅgīsa	”
Sirivaddha	”	Vijayu	”

Vīra

Khattiya

III 薩婆

Yasoja

Sudda

Anthagandha

Vessa

II 毘尼

Atula

” ?

Dantikā

Brāhmaṇi

Buddharakkhita

”

Dhammā

Vessa

Chattapāṇi

”

Guttā

Brāhmaṇi

Culekasāṭaka

Brāhmaṇa

Kisāgotamī

Vessa?

Cūlānatha Piṇḍika

Vessa

Muttā

Brāhmaṇi

Devahita

Brāhmaṇa

Muttā

”

Dhammika

”

Patācārā

Vesso

Esukārī

”

Puṇṇā

Sudda

Ganana Moggallāna

”

Sakulā(or Pakulā)

Brāhmaṇi

Garaha dīna

Vessa

Soṇā

Vesso

Esidatta

”

Sumānāvuddhapabbajitā

Khattiya

Jānussoṇi

Brāhmaṇa

Sumangalamūtā

Vesso

Pāncagadāyaka

”

Ubbilī

”

Pingalakoccha

”

Uppalavaṇṇā

”

Purāṇa

Vessa



Sangārava

Brāhmaṇa

Gopikā

Khattiya

Udaya

”

Kānamātī

Vessa

Uṇṇabha

”

Malikā dyei

”

# VI 優婆夷

Bojjhā

Vessa ?

Sakula

”

Culasuhaddā

”

Suppavāsī

”

? Charanī

?

Visākhā

Vessa

これ丈けでは、總てを盡してゐないが、これ丈けでも如何に多くの舍衛城人が歸佛したかゝ解る。  
以上は舍衛城の人々であるが、更にこれ以外の喬薩羅國人を擧ぐれば左の通りである。

# I 比丘

Anūpana

Vessa

Mendāsisa

Vessa

Brahmali

Brāhmaṇa

Migasisa

Brāhmaṇa

Dhammika

Brahmana

Mudita

Vessa

Heraññātani

Vessa

Passika

Brāhmaṇa

Khiṭṭaka 舍衛の Khiṭṭaka 同名異人 Brāhmaṇa

Sandhita

Vessa

Kosalavijārā

Khattiya

Sena

Sudda

Mahākāla

Vessa

Sumana

Vessa

Ugga

”

Sujātā

”

Upasena

Sudda

Uttamā

Brāhmaṇī

Uṣabha

Vessa

III 優婆塞

Uṭṭara

Brāhmaṇa

Caṇḍa

Vessa, gāmaṇī

Vajjita

Vessa

Citta macchikasaṇḍika

”

Vārāṇa

Brahmana

Vasetha

Brāhmaṇa

Vijitasena

Sudda

IV 優婆夷

II 比丘尼

Dhāṇañjani

Brāhmaṇī

Arōpanā

Vessa

扱て、此を普通にいふ佛十六弟子について云ふと解空第一の須菩提 (Subhūti) が給孤獨長者の弟の子で舍衛城の出である。又巴利『增一阿含』に列擧せらるゝ七十五人の勝れたる特徴を有する四衆に就いて曰へば、妙音第一の侏儒拔提 (Lakunṭaka Bhaddiya)、遠離第一及應供第一の須菩提 (Subhūti)、禪定第一の疑者離波多 (Khaṅkha Revata)、信解脱第一の跋迦利 (Vakkali)、鬬引に好運第一の君荼陀那 (Kunda Dhana)、詩作第一の婆耆婆 (Vangisa)、諸天愛敬第一の畢隣陀婆遮 (Pīlinda Vacca)、美説第一の童子迦葉 (Kumāra Kasapa)、宿命通第一の蘇毘多 (Sobhita)、比丘尼勸誡第一の難陀迦 (Nandaka) の十比丘、神通第一の蓮華色比丘尼 (Uppalavannā)、持律第一の波多遮羅 (Paṭācārā)、

精進第一の蘇那 (Socā)、粗衣第一のキサー喬答彌 (Kṣā Gotamī) の四比丘尼、布施第一の須達長者、説法第一の質多長者 (Citta Macchikasāṇḍika)、布施第一の毘舍佉鹿子母 (Viśākha Migāramātā) の三信者合計十七人が舍衛城及びその周圍の人々である。全印度に亘る大弟子七十五人の中、十七人が舍衛城は附近の人であるといふことで、如何に佛陀の教化が、その地方民の人心に浸透したかといふことが解る譯である。殊に比丘の方では、その錚々たる人達、例へば舍利弗、目連、大迦葉の如き皆王舍城附近の人々で、舍衛城系の人々は次位にある傾きであるが、比丘尼になると、偉大なる者は大低舍衛城系である。釋尊僧尼團七相續者と稱せらるゝ七比丘尼の中、三人が舍衛城出である。殊に蓮華色、波多遮羅の如き大比丘尼が舍衛城の人であるから、僧尼團は舍衛城に依つて輝いてゐると申しても差支なからうと思ふ。又檀越といふ例から云つても、給孤獨長者、その弟の小給孤獨長者あり、婦人の方では、毘舍佉やスツバワサーあり、教團に對して何不足なき布施をなし、この外に末利夫人 (Mallikā Devī) あつて、夫の波斯匿王を促して、時々大施を催さゝむるのであるから、四方の比丘は、茲に集つて、自己の修道に専心なるを得たのである。

斯くの如くして、舍衛城は佛陀在世に於ける佛教の二大中心地の一として、光を四方に放射するに至つた。即ち第一線はセータブヤ、迦維羅衛城、ラーマガーマ、俱尸那羅のヒマラヤ山麓を縫うて行く一帯の地域を経て吠舍離に至る一線、第二はサーケータを経て、ベナレスに至る一線、第三

線は同じくサーケータを経て橋賞彌に至り、後世のバルフトやサーンチを経て、ウデエーに出で一方ゴードワリ河畔に至り、他方スッパラーカ (Suppāraka) 港に至る一線、第四には、僧<sup>サンカツサ</sup>佐舍を経てクル地方に至る一線、第五線は、ソーレッヤ等を経て遠く婆羅門教學の中心地タキシラに及ぶ一線、この五線を以て佛陀及び佛教の名聲を廣く全印度に擴がらせたのである。それであるから、大劫賓那は西北方ベシヤワル地方から來つて歸投し、ワツダ (Vat̐ha) 比丘は今のバロチ、即ち古のバルカッチャ (Bharukaccha) 港から北上して釋尊に歸し、富樓那や、バーヒヤダールチリヤ (Bāhiya Dāruci-ha) はスッパラーカ即ち今のボンベイ州から、舍衛城に行いて、佛陀に見え、ゴードワリ河畔に住したバーワリー (Bhārī) 聖者は佛陀の名聲を聞いて、その十六人の上足の弟子を送つて舍衛に佛陀を求めしめるに至つた。それ故に、佛教がその傳道開始後程なく、全印度に廣まるに至つたのは、當時二大王國の一なる喬薩羅の首都であり、商業貿易の集散地であつた舍衛城を占領し得た故であるといふも不可でないと思ふ。

經典の傳ふる處に依れば、釋尊は、外道よりの妨害を舍衛城に於て受けてゐられる。祇園精舍建立の時に、舍衛城は博學の婆羅門の多い處なればとて、その建築監督として舍利弗を送られた。果せる哉、舍利弗は婆羅門と論議し、神通を競ふ必要があつた。外道は孫陀利女を用ゐて、釋尊の德を傷けんとした。又戰遮女を使うて、同様の企をした。佛陀は更に、外道の抗難を伏せんために、

王國に於て、双神變を現するを餘義なくなされた。これらは皆舍衛城に於ての出來事である。又釋尊が四姓平等を唱へ給ふや、婆羅門の抗議を承け (M. 93)、婆羅門の優越を説く者に對し四姓平等を宣し給へしが如き (M. 96) 皆舍衛城に於てである。然らば、この外道と曰ひ婆羅門といふは何派の者を指すのであらうか。六師外通の中、耆那派は吠舍離を中心としてその姻籍關係から、王舍城に根據地を持つてゐた。舍利弗目蓮の舊師サンヂャヤが若し六師外道中のサンヂャヤ・エーラツタ・プッタ (Sanjaya velsithaputta) ならば、これ又その根據地は摩揭陀にある。富蘭那迦葉、アヂタケーサカンバラ、バクダカツチャヤナ、マツカリゴーサーリは遊行者であるから、足跡は摩揭陀にも喬薩羅にも及んだであらうが、又多く根據を自由派教學の中心地王舍城附近に有してゐたと思はれる。然るに、孫陀利は女遊行者で、「國美にて白衣の遊行者」とあり (S. A. PP. 518-9)、富蘭那迦葉は世尊の双神變を現し給ふを見て、外護者の與へし壺と綱を結び付けて川に投じて自殺した (Dhp. A. III P. 208) とあれば、少なくともその妨害の一二は自由派から出たものと思はれるが、然らば、何故これが王舍城に起らずして舍衛城に起つたものであらうか。余は今これを説明する材料を持たない。只これだけのことを云ひ得る。舍衛城は、王舍城に比してタキシラに近く、何れかと曰へば、正統派の婆羅門勢力の強い處である。従つて釋尊は、自由精神の漲つてゐた王舍城では妨害を受けられなうだが、正統派の婆羅門勢力の強い舍衛城に於て、多少の壓迫を感じられたのである。そ

れであるから、釋尊の四姓平等の宣言は多く舍衛城に於てなされ、迦旃延も亦マトウラに於て四姓平等を説いてゐる。この正統派婆羅門の壓迫に加へて、自由派遊行者側殊に邪命外道派 (Ajivaka) の嫉妬とが、釋尊に對する妨害となつて、舍衛城に顯はれたものであらう。この壓迫と妨害とを切り抜けて、釋尊は舍衛城に於ても法の大勝利を得られた。而して舍衛城の弟子中に於て、婆羅門姓の人々の多い事に依つて、その勝利が實質的であることが解る。

斯くのく、世尊は、舍衛城に二十五回も夏座し給ひ、佛教團と舍衛城との關係が密接であるから、舍衛城及びその周圍に於て、佛教の史跡が頗る多い。

先づ精舍から曰へば、祇園精舍、東園鹿子母講堂 (Pubbārāma Visakṣā Migāramātāpāsāda)、比丘尼の寺であつた王園 (Rājākāraṃ) 質多長者の寄附したマツチカサンダ村のアムバータカ園 (Ambātā-kāraṃ)、差摩 (Khemaka) 比丘が病んで、諸上座の爲に自己の證悟の告白をした跋陀梨迦園 (Baddhikāraṃ)、給孤獨長者の女小須跋陀 (Cūlasubhadda) の感化に依りてその舅カーラカ長者が建立したサーケータ市のカーラカ園 (Kālākāraṃ)、これに加へて、「論議の爲に集會するテンドカ並樹あり一堂なる末利迦園」(Samayappavāda tindhacira ekasāla Mallikāraṃ) といふ恐ろしく長い名で知られてゐる精舍がある。尤も最後のものは總ての遊行者の論議集會の目的を有するものである。この中、現今その位地の發見確定せられたのは祇園精舍あるのみである。王園は釋尊が外道降伏の

爲に双神變を現せられた處で、後に比丘尼の寺院となつた。舍衛城内にある。末利迦園は祇園精舍の附近にあつた。

舍衛城附近で地名の知られてゐるのは、南方六由旬のサーケータ市、佛滅後、童子迦葉に教化せられたバーヤーシ(Pāyāsi)會長の有せしセータブヤ(Setavya)市、これは舍衛城から迦維羅城に至る中道にある。『摩訶僧祇律』二三の都夷、『佛國記』の都維といふはこのセータブヤであるまいか。それからエーランヂヤ(Veranja)市も喬薩羅國にある。アチラワテー河畔のダンダカッバカ(Daṇḍakappa)邑、有名な婆羅門達が吠陀讀誦のために集まつたといふイッチャーナンガラ(Icchāṅgala)村、佛教敎園の維摩居士であり、舍利弗日蓮がその德を聞いて尋ねて行つたといふ質多(Citta)家主の住村マツチカサンダ(Macchikasanda)あり、この外 Ekasāla nalakapāna, Sālā, Sāvātthika, Toranavāthu, Uggā, Ukkata, Veludvāra, Venāgapura 村等がある。林では比丘比丘尼の靜慮思索の爲に多く日中を過した有名な闇林(Andhavana)がある。法顯、玄奘兩師は得眼林と呼んでゐる。また鴛窟摩羅が兇行をなした闇梨園(alini vana)がある。これらは皆、舍衛城の周圍程遠からぬ處にあるものであるが、位置確定は將來の發掘や研究に待たねばならぬ。

猶この外に、法顯三藏は舍衛城内に於て、大愛道故精舍、須達長者井壁、耆掘摩得道般涅槃燒身處の三處の跡に建立せられた塔を見たと記し『法顯傳』致六・三左)、玄奘三藏はその大愛道故精舍、

須達長者宅、鶡掘摩捨邪の處の外に、波斯匿が佛陀の爲に建立せられた大法堂趾をも見たと曰つてゐる『西域記』<sup>三</sup>六致七・二七右)が、この大法堂の事については予は未だ出據を知らぬ。大愛道の精舎といふは、恐らく先に曰ふ王園であらう。鶡掘摩焼身處については、堀氏の『西域記』原本には捨邪の處といふが捨身でなからうか。鶡掘摩が市中にて千人斬をやる筈がないから兇行して後歸佛したのは『上座偈註』(八六六偈の註)及び『本生譚註』の示すが如く閼梨園でなければならぬ。さうすると、その舊趾は鶡掘摩の入涅槃地であらうと思はれる。鶡掘摩は歸佛出家後、その兇行の應報を得た。彼は入城毎に市民から冷たい待遇を得た。然し彼は「ちつとこれを堪へた。彼が「前には放逸、後には不放逸なる彼は雲を離れし月の如くこの世を輝かす」と歌つて入涅槃したのは、恐らく意あつて、舍衛城内でしたのであらう。嘗て冷遇を與へた市民は、今更の如く佛徳の廣大なるを嘆じて、その兇賊の阿羅漢を記念するために起塔したのであると思はれる。現今發掘せられた處から云へば、半月形の中部にある Kachehi Kuti, Stupa A, Pakkikuti の三の中 Canningham 氏は Kachehi Kuti = Sudatta 塔 Pakkikuti = Angulimāla 塔を見せうし、後 Hoey 氏は Kachehi Kuti = Sudatta 塔, Stupa A = Angulimāla 塔, Pakkikuti = 大法堂趾塔と假定してゐる。然しゾオゲル氏の發掘に依れば、カッチ・クテーは毘濕奴派の堂跡の様に見られるといふことである。(A.S. R. 1907-8 pp. 91ff.) 法顯玄奘兩師の見たといふ其等の紀念塔は果して實際の跡を代表してゐるものかどうかも問題であるし、それ



からは印度教の手に移り回教徒の政治下にあつた年代が長いから、實際其等の位置を確定することは不可能事であらう。我等は舍衛城の位置確定で満足せねばならぬ。

次に舍衛城そのものゝ佛教史を語らねばならぬ。前述の如く、原始教團時代には、舍衛城は佛教の二大中心地の一であつた。釋尊滅後、舍衛城は阿難にとつて忘れられぬ場處であつたので、第一結集の前に、わざ／＼道を喬薩羅に取り、世尊の追懷に耽つたのである。(S. IX. 5 及其註 P. 200)、又前に記せし如く童子迦葉も、佛滅後、セータブヤに住してバーヤシ酋長の現在享樂論を破し、歸佛せしめしより見れば、その生國たる舍衛城の法燈を護持した人であらう。我等はそれ以來、阿育王の時に至るまで、舍衛城について聞く處がない。阿育王が佛跡を巡拜して舍衛城に至つたことは、諸傳の記す處であり、又『法顯傳』、『西域記』についても、その建立した門が後世迄残つてゐたことが解る。何故に、舍衛城の佛教について聞く處がないかといふに、私はその理由は、喬薩羅の毘瑠璃王が倒れて以來、摩揭陀の勢力が隆々として昇るに反して、舍衛城は政治の上から、又文化の上から、次第に僻遠な位地を占むるに至つた故であると思ふ。佛滅後佛教の中心は次第に、華子城に移り、百年頃對岸の吠舍離に於て、思想上の衝突があつて分離を生じ、阿育王當時は、一方目犍連子帝須(Moggallāna-putta Tissa)を戴く上座部系は摩揭陀に覇を唱ひ、優波崛多(Uppagutta)を戴く大衆部系はマトゥーラに根據を構へたものと思はれる。難陀王朝が倒れて、シュンガ王朝が立つ

た時は、その迫害に依つて、佛教全體の中心が西方サーガラに移つた様である。何れにもせよ、舍衛城は波斯匿王系の没落と共に文化的勢力を失ひ、従つて佛教の中心地であることが出来なんだ。『西域記』に依ると、提婆設摩(Devāsārman)、瞿波(Gopa)の二師が造論したのは、舍衛城から百哩以内の地、<sup>サール</sup>鞞索迦であるが、その時代の舍衛城の佛教の模様は解らぬ。只、一千八百六十三年、カニンハム氏が、サヘートで發掘した菩薩像の臺石の銘に依ると、迦膩色迦王の時代に、この祇園精舍に一切有部が行はれてゐたことが解る。(FP. Ind VIII. P. 181) 猶一千九百〇八年の冬マール氏に依つて、更に一體の佛像が發掘せられたが、その臺石の銘には *Sīhadevasya Pr(a)var(i)-kasya Sāketasya deydha(r)ma* とあり、佛像の手法、及び字體から見ても後期貴霜朝のものである。それでその時代にサーケータといふ市も猶依然その名を存し、その一市民獅子天なる者が佛像を祇園精舍に献じたことが解る。それから、ずつと下つて、無着、天親の時代に及び、唯識瑜伽の大乗教が宣傳された阿踰闍國も、舍衛城の百哩内外の地である。それから間もなく、法顯三藏は、親しく舍衛城の佛跡を參拜したのであるが、「城内人民希曠都有二百餘家」と曰つてゐるから、遂に一寒村に等しいものになつたのである。それでも、「繞<sup>三</sup>祇洹精舍有<sup>三</sup>九十八僧伽藍<sup>二</sup>盡有<sup>三</sup>僧住<sup>二</sup>唯一處空」であるから、まだく何百人の比丘が住してゐたのである。然しその佛教が如何なるものであつたか不明である。紀元六世紀の末葉玄奘三藏の訪問せられた時は、都城は荒頓し、伽藍は數

百あれども僧徒は寡少であつた。宗派は正量部であつた。正量部は此の附近一體に盛んであつたのである。マーシヤル氏はその發掘に掛る印刻目錄に、紀元六七世期の文字で彫つてある大乘の文句があるを曰つてゐるか、不幸にして其の文句の寫しも抄本も見ることが出来ない。只、紀元八九世紀頃のものと思はれる *Traṭṭokaviṇaya* や *Lokānātha* の石像が發見せられ一千九百〇七年の發掘にも觀音の像、多羅菩薩の像が發見せられてゐる處 (*A.S.R.* 1907-8 pp. 126-7) から見れば、祇園精舎の末期佛教は大乘が若しくば大乘が影響した佛教であることが解る。更に一千八百八十五年 *Hockley* 氏が、發掘した石片の刻文には、*Samvat* 1176 即ち西紀一千二百二十年、曲女城のマダナバーラ王の大臣 *Vidyadhara* なる者が一精舎を建立せしことを傳へ、更にゾオグル一行の發見した銅板に依れば、*Samvat* 1186 即ち西紀一千百三十年に、祇園精舎に住する佛僧伽に寺田を寄附することが刻してある。これに依つて、十二世紀に猶、祇園精舎に佛教が残つてゐた事が立證せられるのである。

### 喬薩羅國王波斯匿王

喬薩羅はギデーハと共に、クル、パンチャラに續いて、印度アーリヤの文化に浴した國である。所謂マトウ (*Mathu*) の子孫が恒河を越えて、ヒマラヤ山麓の沃野に移住したのは、紀元前十世紀前であらう、彼等は喬薩羅に文化の跡を残して、東方に進み、ガンダク河を越えて、ギデーハにそ

の文化の建設を初めた。それであるから、喬薩羅とギデーハとは、密接な血族關係にあつて、阿踰闍 (Ayodhya) の王系と彌稀羅 (Mithila) の王系とは同じく日種であると曰はれてゐる。喬薩羅の首都は、初めは舍衛城でなく、阿踰闍であつた。サラユ河に臨む都であつた。(Vedic Index, etc) 『ラーマヤナ』物語の中心舞臺は、この阿踰闍である。後、波斯匿王の屬する王統が立つに及んで、遙に北方に首都を移して舍衛城と呼んだものと思はれる。佛陀時代は、阿踰闍は顯はれてゐない。サーケータとして顯はれてゐる。後代『ラーマヤナ』が廣く傳誦せらるゝに及んで、阿踰闍の名が復活せらるゝに至つたのである。無着世親二菩薩が活動せられた舞臺として、我々佛教徒に忘れられぬ名となつてゐる。

喬薩羅 (Kosala) の語の意義の穿鑿を茲でする必要はないが、佛典の註釋家は例に依つて面白い人工的な説明をしてゐるから、それだけ紹介して置く。昔、Mahāpanāda という王子が、どうしても笑はない。それで父王が人々を集めて、種々可笑しい舞踊を見せたが笑はない。帝釋天が天の踊女を遣はし踊らするに及んで初めて笑つた。その失敗して歸る人々を友達等が待ち受けてゐて、「出来ただらうねー」(Kacci bho Kusalā, Kacci bho Kusalā) と曰つたので Kosala と呼ばるゝに至つたといふのである。(Sn A.p. 400-1, Sum 1 P. 239)

舍衛城の王統に就いては、我等の知る所は甚だ少ないが、阿踰闍の王統が倒れて、これに代つて

立つたものであらう。巴利『本生譚』に依れば、波斯匿以前の王としては、Vanka (Jat. III. P. 168, 169, 170.) Dabhasena, (Jat. III. P. 13, 14, 15) Kamsa (Jat. II. P. 403, V. P. 112) Mahakosala (Jat. II. P. 237, 403, IV P. 342) の四王があつたことが解る。これらの諸王は皆カーシー國攻略に従つたが、カムサ王には、ベナレス占領者 (Bārāṇasggaḥa) の名が與へてある所から見れば、この王は完全にカーシー國を占有したのであらう。それで、波斯匿の父、摩訶喬薩羅に至つては、その女喬薩羅皇后 (Kosaladevi) を、摩揭陀の頻婆娑羅に嫁せしむる時、そのビン・マチーとして、カーシーの村を摩揭陀に與へてゐる。これが後に説く、波斯匿王と阿闍世王の戦争の原因となつてゐる。摩訶喬薩羅は、西藏傳には Aranemi Brahmadatta としてゐるが (Rockhill P. 16)、摩訶喬薩羅は尊稱で、梵與がその實名かも知れぬ。摩訶喬薩羅には Sumana といふ女があつて、後に佛教々團に入つて尼となつてゐる。

波斯匿王は、今いふ如く、摩訶喬薩羅の子で、その祖母も長生をしてゐられた。その妹は隣強摩揭陀王の妃となり、喬薩羅皇后と呼ばれてゐた。西藏傳で見ると、釋尊と同日の出生であるが (Rockhill P. 16)、年配も大體釋尊と大した相違はなからう。王はその崩御の年世尊を訪うて我れも八十になり、世尊も八十であると曰つてゐる。 (M. 89 中阿第二二三經、增一、二十二卷) 只、波斯匿王が、嘗て釋尊に對し、「尊者は無上正等覺者なりと主張し給ふや」と問ひ、世尊より「我は無

上正等覺者なるが故に無上正等覺者也と主張す」この返答を得、更に「されど尊者、世には尊者より年老いたる沙門あり、喩へば六師の如き是也、彼等は人々に尊敬せられ、而も無上正等覺者也と主張せず、世尊は猶年若く、遊行者中の初心者ならずや」(S. III. 1.1.)と責めた口振りから見、又、釋尊よりも三年程早く死んでゐるので、幾分年長者であつたと思はれる。今我々の知り能ふ範圍内で、波斯匿王の事蹟と、その没落の原因を見たいと思ふ。

王は若くして、タツカシラに留學した。その留學地で、有名な離車族の摩訶利(Mahati)や、後に自分の將軍となつた番頭羅(Bandhula)と相知つた。(Dhp. A. I pp. 337ff.)。さうして歸國後、その即位は釋尊成道前であつたであらう。祇園精舍建立の時分には、既に王として傳へられてゐるからである。さうすると、王は三十五六歳前後には既に喬薩羅と迦尸を合せた一大王國の君主として政治を布いてゐた。彼の領土は、恆河を南の境として、サーケータ、ベナレスを含み、東はガンダク河を限つて跋耆族の共和國に接し、北はヒマラヤ山麓に延び、西はバンチャーラ一體に勢力を存したものだと思はれる。當時四大國王の一で、中にも頻婆娑羅王と併んで、印度の政治舞臺の中心人物となり、その首都は印度敎學の三大中心地の一であつた。その皇后、末利夫人(Mallika devī)は、舍衛城の花鬘師の頭領の女であつたが、非常な才女なので、撰ばれて皇后に擧げられた。王の一生の精神的指導者は、この末利夫人であつた。初め佛陀が祇園精舍に來り給ふや、末利夫人は直に熱

心な佛教信者となつたが、波斯匿王は未だ全くその仰信者とならなんだ。この消息は、先に引いた S. III. I. 1. の文や、M. 87 (同本中阿第二一六經) に「愛する者には、憂悲苦惱、その愛より起る」といふ世尊の語を、波斯匿が引いて、未利夫人に、喬答摩は不思議の事を曰はれるもの哉といふ風に語るに對して、夫人は「大王よ、世尊の曰はれた事ならその通り私にも眞實である」と斷言する。王はその勢に劈易し「未利、汝は沙門喬答摩のいふ事を(いつも)その通りと承認する。よし未利、この事は後にしよう」と逃げてゐる。未利夫人は後で使を遣はし、世尊の語の意味を聞き、巧妙なる例を擧げて王を説服してゐるのでも知られるのである。王は幾度か、未利夫人から心靈上の教育を受けた。或る時に惡夢に襲はれて、迷信に走らんとして救はれ (Jat. A. I pp 334-343)、或は教師の教に依つて、禍を離れたため大供犠を行はんとして諫止せられ、精神修養の道に引き入れられ (Dha. A. II P. 97)、又市民と布施の大を競ふ時、夫人の智慧に依つて、佛一代に一回しかない無等施 (Asamadāna) を行ふを得てゐる (Dhp. A. III P. 184)、王と夫人との間には Vajirā といふ姫がある。この姫が後には阿闍世王に嫁してゐる、巴利『雜阿含』に、王が佛に詣でゝゐる時に未利夫人、女子を生めりといふ報に接し、喜ばざる色あり、佛之を慰め、偈を説き給ふことが記してあるが (S. III. 2. 6) Vajirā 姫のことが若しくは第二女のことか分明でない。かく未利夫人は、その智慧を以て王の精神上の指導をしてゐたから、その仲も善かつた。或る時、王は夫人を携へて、高樓に

あつた。突然問うて曰く、「末利よ、汝は、汝自身より可愛しき他のものがあるか」と、王の意中には、かゝる場合、或る豫期した答があつたのであらう。處が夫人の答は極めて明快である。「大王、自分の身程可愛い者はありません。大王は如何でありますか」と逆襲した。王も仕方がない。「私も自分の身程可愛い者はならぬ」を答へた。(S. III. 1-8, Udana V. 1) この末利夫人は、祇園の佛に詣て、婦人としての大切な教化を受けた。その節の告白に依ると、「世尊、妾は容貌が醜く、云々」とあるが(A. IV. 197)、之れから見ると、我が國の末利夫人に當る光明皇后の如く、美人ではなかつた様である。才氣煥發の聰明な婦人であつた。夫人は王の晩年に、王に先つて逝去した(A. V. 49)、王は夫人の死後、「我が身、我がものに非ざるが如し」と嘆いてゐる(Dhp. A. III P. 119)

末利夫人の外 *Vasabhakkhatiyā* といふ妃がある。これは、王が一には釋迦族といふ名門と婚縁關係にありたいといふ希望と、二には釋尊に歸依して後、その僧伽が、自分に信賴を持つやうにといふ希望から (Dhp. A. I. P. 33f) 釋迦族より容れた王である。傳ふる所に依れば釋迦族は、大名 (Mahānāma) が下婢 *Nāgamunḍā* (Jat A I pp. 133-6) に生ませた娘を王女として嫁がせたのであるといふ事である。(Dhp. A I P. 345) 毘瑠璃王はこの妃の出である。『法句經註』(I. P. 382) に、阿難か後宮に入りて、この兩妃の爲に法を説いた事が傳へてある。この外にもう一人 *Ubbhi* といふ妃があつたこと知られてゐる。この妃はもと舍衛城の富者の女であつたが、美貌の故に召されて



宮中に入り、デーワーといふ娘を生んだ。處が問もなくその娘が死んだので、世をはかなみ、世尊に従つて尼となつた。この妃の偈は長老尼偈第五一一三として残つてゐる。王の兩親については、記事が少ないが、母のことが只一回出てゐる。それは毘瑠璃王子が生れた時、王子の祖母即ち波斯匿王の母后が、王の愛者 (Vallabha) となるべしと曰つたのを耳の遠い大臣が Vidulabha と聞き違へ、遂にその名となつた (Dhp. A I P. 346f) といふことである。然し王の祖母は餘程長命であつたと見えて、王の妹須摩那が、佛に歸依し、尼になりたいが祖母の生きてゐられる内は看護せねばならぬと後宮に留まり、祖母が死なれて尼になつたので、「年老いて出家した須摩那」といふ呼名を得てゐる程である。この須摩那に就いては、釋尊が激勵して、それに依つて阿羅漢果を得るに至つたといふ釋尊の偈が『長老尼偈』第十六偈として残つてゐる。祖母の死に遇うて悲しむ王を世尊は生者必滅の理を説いて慰められた (S. III. 3. 2 同本雜阿四六卷)、この祖母は祠堂金を教團に残した (Vinaya text III 209)。外に兄弟には、前出の頻婆娑罷王に嫁した喬薩維皇后あり、別に Soma、Sakulā といふ二人の妹があつた。或る時、王が世尊を訪ひ奉らんとするや、王に傳言けて世尊の起居を問はせてゐる (M. 90 同本中阿第二二二經には、賢、月の二妹としてある)。王の子としては、祇多太子、未利夫人との間のワチラ、デーワーバカッタヤー后との間の毘瑠璃王子、天死した耆婆女、それに梵達多 (Brahmadatta) といふ比丘になつた人があるが、梵達多の母は誰であるか解らぬ。

“*Divyāvadāna*” 一五三頁以下、及び有部毘奈耶雜事二六(寒二・二六)には哥羅(*Kaṭa*)といふ王子あり、父王の怒に依り、手足を切斷せられたが、阿難佛命に依り、「眞實の誓言」(*Saccakiriya*)に依り、もと通りに之を癒したと記してある。然し巴利『注句經註』一八三頁には哥羅即ち黒といふ大臣あり、デユンハ即ち白といふ大臣と反對に例の無等施に就いて、王の國庫を空にして布施するを難じ、爲に追放せられたといふ事になつてゐる。何れも虚構の人物であることは申す迄もない。かのゴードワリー河畔に數多の弟子と共に住し、後歸佛した聖者バーワリ(*Bāvālī*)は、もと王の家師なりしと傳へ、火與(*Aggidatta*)比丘も、王の家師(*Purohita*)であつたといふ。又童子迦葉は、舍衛城の中で生れたので、王は宮中に引き取つて、養育した。大臣には鬱伽(*Ugga*)、參多帝(*Sandhi*)、尸利阿陀(*Sirivaddha*)あり、將軍に番頭羅(*Bandhala*)がある。この番頭羅に關する事件が、王の悲慘なる最後の原因となつた。王は如法の王として理想的な人であつた。王の寛仁と優しい情愛とは、之を巴利『雜阿含』三の部に於ける佛と王の對話に依つて知る事が出来る。佛陀は心身兩方面に於て、王の相談相手であつた。王が大食美食して肉體の肥滿に苦しんだ時、佛陀は小食を實行せしめて、從前の健康を回復せしめられた事がある(*S. III. 2. 3 etc.* 同本雜四二卷六)。

王は又晩年、阿闍世王に對して寛仁な態度を示した。初め韋提希夫人(*Videha devī*)の子阿闍世が父を殺して王位に昇るや、喬薩羅皇后は悲みに堪えず、病を得て死んだ。波斯匿王はこの始末を

見て怒つて喬薩羅皇后の持參地であつた迦戸の村を取り上げた。これが原因で、喬薩羅と摩揭陀とは戰場に相見ゆる様になつた。初めは波斯匿王の敗軍であつたが、後、兵車を以て、摩揭陀軍の背後を突き挾撃して、阿闍世王を生擒した。然し王は一度その義の甥となつた阿闍世を殺すに忍びず、之を許し且つその女金剛(Vajra)を與へ、再びその姫のビンマチーとして迦戸の村を返し與へた。斯ういふ風に、王は佛陀の指導と未利夫人の指導とで大過なきを得たが、只一つ番頭羅將軍の事で大失敗があつた。番頭羅は未羅族の武人で、タキシラに學び前述の如く、茲で、有名な離車族の摩訶利及び波斯匿王と相知つたのである、番頭羅は學成つて錦衣故郷に歸つたが、國人の容るゝ所とならなんだ。番頭羅は仕方なく、走つて友の波斯匿王に寄つた。王は之を將軍とした。番頭羅の妻は未利夫人と同じく、未利(Mallika)と呼ばれてゐた。同じく釋尊の信者であつた。初め子がなく、爲に苦しんで、釋尊の教を煩はした事があつたが後妊娠するに及び、妊娠中の奇欲(Dohala)として、吠舍離の湖水に浴したいと言ひ出した。番頭羅は大膽に妻を連れて、その湖水に浴みさせた。吠舍離の貴公子等は、番頭羅の傍若無人の態度を怒つて、之を逐うて殺さんとした。當時眼疾の爲に退いて公子等に學を授けてゐた摩訶利は、友番頭羅の武勇を知つてゐるから、公子等を諫めて、逐ふことを止めさせんとした。公子等は之を聞かず逐ひかけたが、番頭羅は強弓を以て敵を苦しめ優悠と喬薩羅國に引き上げた。後夫婦の關には、澤山の子が生れた。番頭羅は一面斯くの如き豪快な人

物であるが、又極めて剛直で、當時腐敗してゐた裁判所に入つて、判事の代りに正當な裁判をした事もある (Jat. W. P. 150)。こゝにいふ風であるから、人民の歸仰する所となり、權勢が非常に加はる様になつた。之を見て、輕い嫉妬に難む王に讒謗が利いて、王はその子等と共に番頭羅を欺き殺した。妻の未利はこの時丁度家に比丘を供養してゐたが、之を聞いて些も、色を變せず、靜に供養を終つた。後、未利丈けは許されて郷里の末羅に歸る事になつた。この事は、王の一代の大失策であつた。この失策が何時起つたかは不明である。定めし未利夫人逝去後であらう。夫人に先立たれたり、將軍を殺したりした故か、王の晩年の心持は非常に感傷的になつてゐる。或る時演習から歸つて、急いで祇園精舎に訪ひ、香殿にゐ給ふ釋尊の前に倒れて御足を接吻し、佛の十徳を讃えたり、世尊が釋迦族のメータルヤ村にゐ給ふを、夕暮から馬を馳つて訪問したり、釋尊を信仰する度の深まる反面には遣る瀨ない心持があつた。この心持を以て、釋尊をメータルヤに尋ね、謙虛の心から、一切の王章を取り去つて侍臣の提伽迦羅耶那<sup>ディガカライヤナ</sup> (Digākarayana) に渡し、裸足で、世尊の御許に近いた時が、王の最後であつた。提伽迦羅耶那は、殺された番頭羅の甥であり、常に復讐の期を伺つてゐた。一方には、既に壯年に達して脾肉の嘆に堪えない毘瑠璃王子がある。提伽迦羅耶那は託された王章を持つて舍衛城に走り、毘瑠璃王子を擁立した。老王は萬事休せりと知つて、走つて婿なる摩揭陀の阿闍世王に寄らんとしたが、その城門に達して遂に崩御した。毘瑠璃王は位を得て、豫て

の志願なる釋迦族の殺戯を企てた。(Dhp. A I pp. 337H)

註一。須摩那に就いて、リス・デヅ氏は其の『佛教印度』(十頁)に王の叔母としてゐるが、『長老尼偈註』(二十二頁)には明に妹となり、『増一阿含經註』(錫蘭版六百十七頁)には、只「王の娘」としてゐるが、前後の關係から見ると王とは波斯匿を意味してゐる。而して祇園精舎の出來上つた年、芳紀十七、給孤獨長者の願に依り、五百の少女を率ゐて、行列を作つて釋尊を迎へたといふ。『長老尼偈註』に依る。

註二。有部毘奈耶雜事七(寒一・二五)には兩妃ありとし一を勝鬘(Mallikā)、本名明月(Candina)大名の婢にして、波斯匿に召され、毘瑠璃太子を生み、他を行雨(Vasabhakhattiya)を Vasakara と見て譯す)とせり。即ち全然反對なり。

註三。波斯匿の祖母の死に就いては、増阿十八(晨一・七五)異譯波斯匿王太后崩塵土全身經(晨四・四丁)には母となし、年百歳と記してゐる。

註四。未利夫人のことは、摩利(晨四・四一左及び晨四・四二左)摩尼(晨四・四三左)及び勝鬘(寒一・二五)等となつてゐる。『勝鬘經』及び『勝鬘夫人會』には王の妃は未利で、王と未利夫人との間に出來た姫が勝鬘と呼ばれ阿瑜闍(又は無闍 Avatthā)國の友稱(Mitrayasat)王に嫁してゐるとしてゐる。阿瑜闍の事は前にも曰ふ通り、舍衛城の勃興と共にその名を失ひ、佛陀當時には名さへ出て居らぬ。その名の復活したのは『ラーマヤナ』が一般に讀み傳へられる様になつてからである、従つて、未利と勝鬘を別人とするのも妙なれば、勝鬘が存在しない國に嫁せしめたのも變である。

### 給孤獨長者及び祇園精舎

釋尊教團の有した精舎の中で、最も有名なるは祇園精舎である、その在家信者の中で最も名の知られた人は、給孤獨長者である。給孤獨 (Anāthapiṇḍika) の名は善く孤獨に給與したので人々から

與へられた嘉稱で、本名は須達多(Sudatta)である。在家の弟子中、布施第一の人である。(A. p. 17. 増三・一)舍衛城の長者で、その妻が、王舍城の一長者の妹であるので(Culavagga VI. 4. 1)商用に王舍城に行く時には、その長者の家に宿るを常とした。この長者の名は、『摩訶僧祇律』二三(列九・六〇左)には、鬱虔(Ugga?)、『賢愚經』一〇(宿九・五八)別譯『離阿含經』九(辰五・六一左)には護彌とあるが、南傳の方では、その名を載せてない。この家で、始めて「佛陀」といふ語を聞き、感激して五種の喜を生じ、末明に寒林に佛に見え、信佛者の一人となつた。祇園精舎は、佛を舍衛城に招せん爲に建立したもので、建築監督は舍利弗であつたといふ。舍利弗とは晩年迄仲善く、殊に病氣の時には、舍利弗の訪問を乞うてその説法を聞いた。彼の父母は知られてゐない。妻はもし『小會部』の説を正しとすれば、王舍城の長者の女である。兄弟には、小給孤獨(Culīnathapindika)と呼ばれた須摩那(Sumana)がある。有名な須菩提(Subhūti)尊者は、この須摩那の子で長者の甥である。病を押して、上座達の前に行き七十八の上座の前で所得の告白をしたといふ差摩(Khemuka)比丘も長者の甥であるが、これが須摩那の子であるかどうかは解らない。この差摩は美男子で放蕩の爲に長者の愁であつたといふことである(『法句經註』三・四八一頁) 長男の名は知られてゐないが、その長男の妻が有名の『玉耶女經』の對告衆須闍多(Sujāta)である。須闍多是、鹿子母毘舍佉(Visakha)の小妹である。(『増一阿含經註』七三〇頁に依る)。それであるから、舍衛城の二豪家、ミガラ家と

スダッタ家とはサーケータの陀南闍那(Dhananjana)家と姻戚關係になつてゐる。女には摩訶須跋多(Mahāsubhadda)小須跋陀(Cūḥsubhadda)及須摩那提毘(Summadēvi)の三女があつた。この須摩那提毘は娘盛りで死んだが、一來果を證つてゐたので、父の長者を「弟よ」と呼んで死んだので、長者は狂死したのではないかと心配して佛陀に御問ひ申し、證悟の上からは、豫流果の自分は弟であるを知つたと傳へられてゐる。一番姉の大須摩那については釋尊初めて祇園精舍入をなされた時、行列に加はつて御迎ひ申した事と、豫流果の人であつた事と他へ嫁した事が知られてゐる丈である。もし『増一阿含』註一六〇頁の記事が正しいから、この人は喬薩羅の鬱伽市(Uḥga)の鬱伽長者の家に嫁した。小須跋陀はサーケータのカーラカ(Kāḥka)長者の家に嫁したが、その家が裸形外道を信じてゐるので、信仰の相違で苦しんだが、佛及佛弟子を招じて、一家を佛教信者とならしめた。然しこの史實は頗る混亂してゐて、一寸その紛亂を解くことが出来ない。といふのは、この嫁いだ家を改宗せしめたといふ事は元來毘舍佉に關したことで、毘舍佉の鹿子母(Migālamātā)と呼ばれるに至つたのはこの爲である。元より信仰厚い家の娘達が、その嫁ぐ先々の家を改宗せしめたといふ事は有り得べき事であるが、毘舍佉に關する事が同様に大須跋陀にも小須跋陀にも起つてゐる。『増一阿含經註』一六〇には大須跋陀が鬱伽市の鬱伽家を化した事が出て、『法句經註』三ノ四六五には小須跋陀が鬱伽家に嫁して一家を化したのであるとしてある。『増一阿含經註』五一七には小須跋陀は

サーケータのカーラカ家に嫁いで一家を化したと記してある。それであるから、デブイヤーワダーナ四〇二には小須跋陀 (Sumāgadhayānā となせり) の事件と毘舍佉の事件を混じて、小須跋陀が Puṇḍavardhana の Puṇḍavardhana の息に嫁したとしてある。Puṇḍavardhana は Puṇḍavardhana の誤れる梵譯で、實際は毘舍佉の夫である。『増一阿含』二・三(景二・五)『須摩提女經』(景四・一二—一二三)には滿富財の滿財長者としてあるが共に Puṇḍavardhana の譯である。『三摩竭經』(景四・十九)の三摩竭は Subhadda の訛譯であり、分陂檀は Puṇḍavardhana の訛譯であらう。然し國の名を難國としてゐるのは何の訛譯か解らない。恐らく Puṇḍavardhana の最後の dha を示したものであらう。『給孤長者女得度因緣經』(景四・五)は福増城 (Puṇḍa vardhana にて巴利 Puṇḍa 梵語 Pūrṇa を Puṇḍa (福)と見て譯せしもの)の謨尸羅 (Mūṣṭi?) の息牛授 (Godatta?) に嫁したとしてある。斯くの如く混亂してゐるが、我々はこれを幾分原形に戻す事が出来る。即ち毘舍佉は舍衛城のミガーラ長者の息ブンナワツダナに嫁して、その家を改宗せしめ、小須摩那はサーケータのカーラカ家に嫁して、その家を改宗せしめた。大須跋陀はウツガ市のウツガ家に嫁した(茲にはその改宗事件なし)といふ風にである。これは『デブイヤーワダーナ』を始め、總て漢譯諸經は混亂してゐるから、巴利系の傳説の比較的ハッキリしてゐる方を取つたのである。然し巴利系の方も總て後世の佛鳴護法の註の記事であるから、混亂を整理した結果であるとも曰へる。然し自分はその他の場合をも參酌して、南傳系



に左擔し、改宗事件は毘舍佉にも小須跋陀にも起つた事として置く。

この娘達の外に、『法句經註』三ノ九に依れば黒(Kāla)といふ子があつて、佛法を信じない、長者は金を與ふると約して聽法せしめ佛法に引き入れたとあるが、これは、『阿那邪耶化七子經』(景四・三三)に長者の七子が佛法を信せず、長者は各々壹千金を與へて佛法に引き入れたといふのと同源であらう。『長老偈』第十七偈の作者ダーサカ(Dāsaka)は、この長者の奴隷の子であり、フンナーといふ下婢は、釋尊が舍衛城を去つて南方へ行かうとせられた時、長者の命を受けて之を停め 功に依つて、自由人にせられた。又佛教信者で非業の死を遂げた難陀いふ者が、長者の牛を牧してゐた(『法句經註』二・三三二)。

長者は穩かな性質の人であつた。眞乎の長者型の人であつた。論議に長じた質多ヂツタの智慧なく、四攝事に長じた手長者ハツタカの如き偉大な人格でもなかつた。長者の證語は豫流果以上に上らなんだ。溫乎たる在家信者の好標本で、五百人からの信者の團體を率ひて、佛教團に奉事し教を受くるが樂みであつた。その個人的に受けた教は諸經に散説してあり、巴利『增一阿含』四ノ部五ノ部六ノ部に多く出でゝゐるが佛陀はその性質に應じて、孰れかと曰へば、卑近の事を教へてゐられた。長者は一家を擧げて佛教團に奉事し、その奉獻した祇園精舍に佛陀及び佛弟子の住し給ふ事が解もなく嬉しかつた。彼は死後天上界に生れる幸福を得、祇園に下つて、左の喜びの歌を歌ふたと傳へられてゐる。

(巴雜一・五・八巴雜二・二・一〇巴中三・二六二頁漢雜二二・一八等參照)

これは彼の祇園の精舎、

聖者の僧伽の住家、

法王茲に住み給ふ、

そを思ひ、我れに喜び生じぬ。

彼の晩年には、家計が少しく衰へた様に思はれる。世尊の間に答へて、「布施を續いてしてゐます  
が疎末なもので耻かしい」と曰つたことがある(巴増九・二〇)『法句經註』三・九頁以下に依ると、こ  
の疎末な布施せねばならぬ様になつたのは、五十四俱低の富を費して精舎を作り、日々大供養をな  
し、八十俱低の債權が動かず、八十俱低の伏藏が水の爲に流された爲である。處が、その門倉に住  
する天(藥叉)が倉が空になつたのを見て、長者に向ひ、もう布施をするなど忠言をしたが、長者は  
怒つて、その天に門倉を出て行けと命じた。天は子を連れて門倉を出たが、行場がないので、帝釋  
天に智慧を借り、長者の八十俱低の債權を回復させ、海に流れた伏藏を取り返し、長者に謝して門  
倉に歸るを免された。これから家運が再び繁ゆる様になつたと記してある。私は先きの巴利『増阿』  
の文とこの物語を照し合せて見て、この物語の中に幾分の眞實あるを見るものである。長者は晩年  
病を得て、時々舍利弗と阿難の訪問を受け、法悦を得たが遂に釋尊よりも早く逝去し、天界に生れた。

祇園精舎の建立について、祇多林の選擇と、祇多太子との係争になつた事は、周知の事であるから略して、茲にどういふ建物が建てられたかを見よう。『小會部』六には祇多太子が一つの物置小屋を建てたこと、長者が居間 (Parivāṇa)、物置 (Kōṭṭhaka)、集會所 (Uṭṭhinasāla)、火屋 (Aḅḅisāla)、臺所 (Kappiyakūṭi)、便所 (Vaccakūṭi)、經行所 (Cankamanasāla)、井戸小屋 (Uḍḍapinasāla)、溫室 (Jantagharasāle、阿屋 (Mandapa) 等を立てたことが記してある。病室 (Gṛhanasāla) の事は記してないが、勿論あつたに相違ない。法堂 (Dhamasabha) の事は『本生譚註』一・三一六に出てゐるが、後世に出来ても、精舎建立の初期からあつたものとは思はれない、長者が賣地と建築と入寺式との爲に五十四俱低の金を費した事は南北諸傳一致してゐる。

然し上記の建築は、一般的であつて、その精舎にもあるのであるが、更に之を大きな建築で分けて見ると、左の四個になつてゐる。

Gandhakūṭi

Kareṇimandalamaṇḍa

Kosambakūṭi

Candanamaṇḍa

右は Suttanipīṭa 註四〇三頁に出づる所である。もし『長阿含經註』二六二頁(錫蘭版)に依れば、第

四を *Salaghara* としてゐる。この旃檀室チャンドナマールとサラ、屋とは多分同一であらう。而して『長阿含經註』に依れば、前三者は給孤獨長者の所建で、第四のサラ、屋は波斯匿王の所建である。

*Gandhakuti* (香窟) は、云ふまでもなく、釋尊の居室で、精舎の真中に立てられたものである。  
(*Jataka* I 92) 芳香の薫せる香窟 (*Surabigandhavāsila Gandhakuti*) といふ語が時々、本生譚に繰り返されてゐる。舍衛城の人々は、香華を持つて精舎に行き、何處とその香華を供養する所もないので、皆、香窟の戸の前に置いて悦んで去つた『本生譚註』四・二二八)。

*Kosambakuti* は、コーサンバといふ樹が、その窟の戸口に立つてゐるので、名を得たものである。巴利『雜阿』一〇・六には、阿那律が祇園精舎に住して法句を歌誦した事が出てゐるが、その註二二二頁に依れば祇園精舎の一端にあるコーサンバ窟に住して歌誦したものとなつてゐる。このコーサムバ窟が、祇園精舎の中の建築物の所在を確める唯一の手掛である。前出の如く一千八百六十二年、カンニングハム氏は、臺石に銘ある一菩薩を發見し、その發見した場所の建物 (*Zo. 3*) をコーサムバ窟であると曰ふてゐる。私も此が正しいと思ふ。千九百〇八年のゾアゲル氏の發掘報告に依れば、この窟に附屬した經行所も發見せられた。(A.S.R. 1907-8 一二三頁)。もしこの「第三號」をコーサムバ窟とすれば、私は前掲の巴利『雜阿含註』二二二頁の記事に依り、「第三號」を精舎の端にあるものとして、それより上部の地域は後世に附け加へられたものとしたい。そして香窟は精舎の

中央に建設せられたといふ記事を生<sup>いか</sup>して「第五號」を香窟と定めたい。第五號は、精舎の中央部にあり、現今の發掘の跡に依つて、釋尊滅後、これが佛像を安置した聖殿となり、後塔と變つた様に見えるが、これは佛徒が香窟保存として取つた適當な所置であると思はれる。「第二號」は香窟としては、その位置から曰つて一方に偏し、且つ建築の性質が、比丘等の寮舎の變じたものゝ様に思はれる。Karemaṇḍalamāla と Salajghara とは共に同じくカレリー樹、サラ、樹に因んで付けた名であるが、何の方面に建てられたものか知るに由がない。

翻つて、漢譯諸傳の方面を探ると、道宣律師の『戒壇圖經』には支那風の樓閣を並べた壯麗な精舎の想像圖が載せてあるが、『十誦律』三四(張五・二〇)には十六大重閣、六十窟屋を造ると曰ひ、『有部毘奈耶破僧事』八(寒三・三六)には、「造寺十六所、別に六十四院を造る。悉皆重閣」とあり、『賢愚經』一〇(宿九・六〇)には佛の香窟の外に「別房住止千二百處百二十處別打犍稚」とある。先きに引用した『本生譚註』一・九二にも、香窟を中心として、周圍に八十の上座の私室を造つたとあるから、今の錫蘭の寺院に見る様な、比丘の住居が幾つも建てられたのであらう。例のバルフトの彫刻に、この精舎の建立に關するものがある、香窟とコーサーンバ窟とが顯はしてあるが、リス・ギス翁の様に、この彫刻から直に實物を推定することは誤である。

次に祇園精舎の廣褒について、一言すれば、『本生譚註』一・九四頁には、十六カリーサ (Kāṇṇisa)

あつたとしてある。カリサは四アムマナ(Ammāna)であり、一アムマナを二エーカとすれば、これを坪數に換算して、約十五萬六千六百八十七坪となる。又『賢愚經』一〇(宿九・五九)には八十頃の地としてある。一頃を百畝とし畝を古法に依て百歩とすれば、八十萬歩になるが、頃が梵語の何を譯したものか解らぬから、今はこれに就いて何とも曰ふことが出來ぬ。道宣の『戒壇圖經』も『賢愚經』に依り八十頃としてゐる。然るに現地の實測に依れば、長さ千六百呎、廣さが四百五十呎から、七百呎迄である。(A.S.R. 1907-8. P. 117)。坪數にすると、三十二エーカとあるから(J.R.A.S. 1908. P. 971)、約一萬九千七百七十坪となる。而しても私の想像するが如く現今の地域の上部が後世の附加であるといふ説が正しければ、上部を取り去つて約一萬三四千坪の地面となる。余は『本生譚註』の記事を十層倍に擴大したものと見て、當時の祇園精舎の面積は、一萬三四千坪のものであつたと信するのである。

釋尊には、この精舎はなじみの深い處であつた。四十五年教化の中で、十九年もこの精舎で夏坐をせられた。従つて最も多くの經典がこの精舎で説かれた。病比丘の看護もこの處、双神變を現じ給ふたのもこの處、舍利弗が會衆に向つて獅々吼したのもこの處、従つて又戰遮チンチャの事件や、孫陀利スンダリ女の事件等、外道からの邪魔を受けられたのもこの處であつた。遊戲に耽つてゐる小兒達が喉が渇いて水を吞まんと精舎に入つて來たのを呼んで、子供相手に法を説かれたのもこの處であつた。そ

れであるから、阿難は、釋尊を圍繞し奉つてから、その遺物を携へ、追憶の遺瀨ない心を抱いて、王舎城へ行く途を、當地に遠廻りして、香窟に世尊を偲び奉つた。住むべき主人のない香窟の姿は、阿難に堪えられぬ思を與へたであらう。佛滅後當精舎は、主に童子迦葉などの活動舞臺であり、佛子巡禮の聖蹟の一であつた。阿育王も、巡禮して東門の兩邊に兩石柱を建てた。法顯玄奘兩師は、この兩石柱の存せし事をその記行に載せてゐる。法顯師はこの精舎に親ら詣で得た事に就いて深い感慨を示してゐる。かくの如く佛陀及び佛教に關係最も深い精舎であるから、この同名の精舎は、錫蘭にも安南にも建立せらるゝに至つた。日本にても、精舎と曰へば祇園精舎を思ひ出す様になつた。最後に、私は、この祇園の地が、過去六佛の時にも祇園精舎と同じ精舎が建立せられた聖地であつたといふ傳説を生じた事を記し、その建立者の長者の名を左に挙げ、『本生譚註』一・九四(て、この稿を結ぶ。

佛

長者

Vipassi..... Punabbasumitta

Sikhi..... Sirivaddha

Vassabhu..... Sothiya

Kakusandha..... Accuta

舍衛城及び祇園精舎の研究

佛教研究 第一卷 第一號

Koṇḍamāna.....Ugga

Kassapa.....Sumaṅgala

Gotama.....Aṅgīrāṣīdika